

二〇二六年度

適性検査型入学試験Ⅰ

注 意

- 1 問題は 1 のみで、8ページにわたって印刷してあります。
- 2 試験時間は四十五分で、終わりは午前九時四十五分です。
- 3 声を出して読むはいけません。
- 4 答えは全て解答用紙に明確に記入し、**解答用紙だけを提出しなさい。**
- 5 答えを直すときは、きれいに消してから、新しい答えを書きなさい。
- 6 **受験番号と氏名**を解答用紙の決められたらんに記入しなさい。

受 験 番 号	
氏 名	

中村中学校

問題は次のページからです。

1 次の文章1と文章2を読んで、あとの問題に答えなさい。

(設問の都合上、本文を改変、省略したところがあります。)

文章1

私たちの名前に対する考え方は、大きく二つに分けることができる。ひとつは、①名は体を表す、名前はその人そのものであるという「名実一体観」。もうひとつは、名前は人物を特定する符号に過ぎないという「名前符号観」とでも呼べる考え方。私たちの名前に対する感覚は、この二つの考え方の間をさまざまな程度で行き来している。

日本の「名実一体観」は、すでに古代から神々、ミカド、天皇の名を書いたり口に出すことを避ける「実名敬避」の伝統にみられる。さらに、古代・中世においては、自分の名前を知らせることが、その人の弟子や従者になる、あるいは、敵に降伏する意味を持っていた。

実名敬避の伝統は、現代でも、目上の人を名前で呼ぶことを避けるという形で残っている。会社では、下の方は上の人を名前ではなく職名で呼ぶが、上の方は下の人を名前で呼ぶ。社員は、社長を「社長」と呼ぶ。しかし、社員に、

「社員」と呼びかける社長はいない。「中村さん」と名前で呼ぶ。目上の方は下の人を名前で呼んでも良いのだ。家庭でも、弟は兄を「兄さん」と呼ぶが、弟を「弟さん」と呼ぶ兄はいない。学校でも、生徒は先生を「先生」と呼ぶが、生徒を「生徒」と呼ぶ先生はいない。

それ以外にも、名実一体観は、さまざまな所に顔を出してくる。

私たちは名前の言い間違い、読み間違い、書き間違いは、他のことばの間違いと比べて、失礼なことだと認識している。卒業式で、名前を読み間違えられたら、がっかりだ。

「スマホ」「パソコン」など、なんでも省略して短く言う時代でも、人の名前は本人の承諾がなければ省略しない。

先日公園に行ったら、「シロー」と呼ぶ声がした。すると、声の主をめぐって真つ黒な犬が走り寄ってきた。ちぎれるほどにしっぽを振って飼い主に頭をなでてもらっている黒い犬を見て、飼い主のユーモアに、ほっこりした。そして、「シロ」の意味など関係なく、自分の名前に反応する犬をかわいらしく思った。これも、「シロ」という名前ならば白い犬だろう」という名実一体観を裏切る命名だったからこそ感慨だろう。

35

名実一体観は、日本に限ったことではない。ファンタジー文学のベストセラー『ハリー・ポッター』シリーズでも、多くの魔法使いが、闇の帝王「ヴォルデモート」を「名前を言っではいけないあの人」と呼び、その名前を口にしないばかりか、ハリーがその名前を言うと、あたかも、名前そのものが本人であるかのように恐ろしがる。

グリム童話の中には、自分の名前を当てられると怒って自分自身を引き裂いてしまう小人が出てくる、『がたがたの竹馬こぞう』という話がある。

名実一体観を大きく変更させたのが、明治五（一八七二）年に明治政府が発布した改名禁止令と複名禁止令である。

それまでの日本では、元服、襲名、出家、隠居など立場が変わるごとに改名していた。元服をすれば幼名から成人

名へ（伊達梵天丸→伊達政宗）、隠居をすれば改名（滝沢馬

琴→滝沢笠翁）、出家をすれば俗名から戒名へ、職業、

立場、地位の変更が必然的に改名をともなっていた。このうち、戒名は現在でも機能している。仏壇の中の位牌に書いてある名前だ。

さらに、官名や国名など一人の人が同時に複数の名前を使うこともまれではなかった。「赤穂浪士」で有名な大石

内蔵助の「内蔵助」は官職を指し、元の名は、大石良雄だ。宮本武蔵の武蔵は、武蔵の国からきている。

江戸時代まで日本は多くの藩に分かれていた。しかし、明治時代になって、日本をひとつの国に統合しようとしていた明治政府にとっては、国民を把握してしっかり徴税・徴税することが重要であった。そのためには、国民が

名前を変えたり、同じ人が複数の名前を使っていたのでは困る。そこで、一人がひとつの名前を使って戸籍を編製するように定めたのだ。改名するためには、国に届けて承認してもらわなければならないとなった。

私たちにとって当たり前になっている「一人にひとつの名前」が生まれた背景には、国家が国民を管理する目的があった。以降、国家は国民の名前をさまざまな形で規制していくようになる。

これを読んで、「そんなことはない。私の好きなアーティストは、みんな、個性的な名前で活躍している」と、思った人がいるかもしれない。その通りだ。私など、どちらが歌の題名で、どちらが歌手の名前なのか、わからないときがある。しかし、そんなアーティストも、税金を納めるときや、健康保険に加入するときには、戸籍に登録した氏

名を使っているはずだ。

一人一名主義は、名前を、個人を識別する符号のようにみなす考え方に結び付いた。その結果、現代の私たちは名前に関して名実一体観と名前符号観の両方をあわせもつにいたったのだ。

ちなみに、日本で子どもに名前を付けるときと、アメリカなどのキリスト教圏で子どもに名前を付けるときでは、大きな違いがある。

日本では、漢字やひらがなの意味や音、字画を意識して組み合わせることで、新しい名前を作ることが多い。一方、キリスト教圏では、いくつかある聖人の名前から選ぶ^{いつばんでき}が一般的だ。だから、私のアメリカ人の友人には、ジョンがやたら多い。ジョンは、ヨハネに由来し、キリストの人間の父もヨハネだ。

このような命名方法の違いは、同じ名前を持つ人に対する感覚にも^{えいさよう}影響^{あた}を与えている。新しい名前を作る日本では、同じ名前、しかも、漢字まで同じだと、その人に親近感を持つことが多い。一方、たくさんの「ジョン」がいるアメリカでは、相手も「ジョン」だと分かつてても、苦笑いするだけだ。

95

90

85

80

ある日、私のもとに、きれいな絵ハガキが届いた。だれから来たのかと差出人を見ると、「中村桃子^{ももこ}」と書いてある。自分が旅先から絵ハガキを出した覚えはないが、宛名^{あてな}も中村桃子だ。読むと、本屋で私の本を見つけた方が、たまたま、私と同じ中村桃子という名前の人で、うれしくなつて、わざわざハガキをくださったそうだった。これも、名実一体観が生み出した縁^{えん}だろう。もちろん、私もうれしくなつてお返事を出した。

先日、出会った人は、もつと徹底^{てつてい}していて、自分と同じ名前の人の会を作ったそうだった。たしか、「ひろゆき」だった。漢字も同じでなくてはならない決まりにしたが、全国各地から、さまざまな職業や立場の人が参加しているという。同じ名前を持つという親近感があつたので、はじめから親戚^{しんせき}のように話すことができたそうだった。このような感想も、名実一体観の強さを示している。

このように、名実一体観と名前符号観が混在している地域では、人の変化と名前の間に二つの関係を想定することができる。

ひとつは、人が変化したから名前を変えろという関係だ。名実一体観によれば、人物が変われば、それに合わせて名

115

110

105

100

前も変わらなければいけないことになる。実際、先に見たように、明治時代までは、多くの日本人が一生にたびたび改名していた。

もうひとつは、名前を変えることで、自分も変化しようとするという関係だ。最初の考え方では、人物が変身したので名前も変更しているが、この考え方では、人物はまだ変身していないのに、先に名前を変えることによって、人物にも何らかの変化が起きることが期待されている。

これは、病氣・厄除けのげん直しのための改名に見られる。滝沢馬琴も六一歳の厄年に篁民と改名した。現在でも、事故や病氣の後に改名する人がいる。

また、ペンネームや芸名など、個人のイメージが重要な職業の人は別の名前を用意する。美空ひばりの本名が加藤和枝だと聞いて驚く人もいるだろう。

このように、名前を変えることによつて、名前を付けられたものも変更してしまうという現象は、一般的なことは働きにもひんぱんに観察されるものである。たとえば、それまで「中村アパート」と呼んでいた建物を「リバーサイドパレス」と呼び直すと、同じ建物でもかなり異なつて認識される。商品名が重要なのは、ネーミングによつて売

り上げが変わってくるからなのである。

さらに、こうなつてほしいという願いを名前に託す、親が子どもに命名する場合がある。親は、姓名判断や字画を考慮して、子どもが幸せになるように命名する。美しくなつてほしいければ「美」をつけ、大きく飛び立つてほしいければ「翔」をつける。名前という「ことば」には、指している人を作り上げ、時として、アイデンティティを与える力があるのだ。

（中村桃子『「自分らしさ」と日本語』筑摩書房）

文章2

日本の社会が豊かになり、生活と時間に余裕よゆうが生まれるにつれて、昔には考えられなかった、いろいろな店が町を彩いろどるようになったが、その一つに花屋・園芸店がある。

私は大の植物好きなので、店先に色とりどりの草花の鉢はちが綺麗きれいに並べてあるのを見ると、つい入ってしまう。

ところが、店一杯いっぱいに飾かざってある美しい花、珍しい植物を見る楽しさに水を差すものが、その名前なのである。今では、大袈裟おおげさに言えば日本語の名を見つけることが苦勞なぐらい、花の名、植物の名称めいしやうが外来語のカタカナに変わってしまったている。

《 中略 》

アジアンタム、オーニソガラム、ラナンキュラスといったカタカナ語を見て、すぐそのことばとしての意味（実物ではない）が理解できる人は、まず日本にはいないと思う。したがって、何のイメージも浮かばないはずである。つまり、これらはそのまま覚えるしかない単なる符牒ふちようにすぎない。しかしこのことは、花が好きな人々にとっては大問

題なのである。

コスモス、ヒヤシンス、チューリップのような、比較的多くの人が慣れ親しみ、今では日本語と化しているようなものならまだいい。だが、オーニソガラムの鉢を買って家に戻もどってきたら、もう名前を忘れてしまい、店に電話して再び尋ねる羽目になるようなことが、実際にしばしば起たまっている。カランセとカランコエの区別が出来なくて困った人もいる。

《 中略 》

変わった名前の一つや二つなら、まだどうにかなるが、このようにたくさんのカタカナ語が溢あふれ出すと、近年の園芸ブームを支える年配の人たちにとっては、肝心かんじんの草や花の名前が覚えられないことが、いまや大きな悩なやみとなっている。少なくともこの領域では、カナ書きの外来語は、もはや明らかに伝達の障害になつておりといわざるを得ない。

さて次に、従来の日本語による草花名の一部を掲かかげるのを見て欲しい。この中には昔からある古い名称と、明治以

来外国から入ってきた植物に対して、学者や園芸家が新しく考えてつけた名前の両方が含まれている。例によって、私の思いつくままの順序不同である。

孔雀羊齒、胡蝶蘭、蝦根、松葉菊、鯛釣草、日々草、千日紅、金魚草、朝顔、昼顔、夕顔、金盃草、翁草、飛燕草、風車、鉄線、風鈴草、百日草、宵待草、春蘭、ひま

わり、ねじばな、おだまき、狸々草、雪割草、水引き、

釣鐘草、矢車草(菊)、風知草(うらはぐさ)、はないかだ、

ぎぼうしゆ、錨草、あかね、むらさき、九輪草、九階草、

せんぶり、げんのしようこ、車ゆり、鉄砲ゆり、鬼ゆり、

こ鬼ゆり、黒ゆり、乙女ゆり、すかしゆり、なるこゆり、

桜草、ひがんばんな、釣舟草、くちなし、采配蘭、おじぎ

草、芝桜、釣鐘人參。

読者の中には、特に花や植物に関心のない方も多いと思う。しかしここに例示した植物名を見れば、かなりの名称から、その形か、色か、性質のどれかが想像できるのではないだろうか。

少なくとも実物を前にして、たとえば、どうしてこの羊齒が《孔雀しだ》と呼ばれるのかを、「まるで孔雀の拡げた尾羽のような形の葉をしているでしょう」と説明され

ば、もう決して忘れない。それをアジアンタムですと言われて、いつまでも覚えておくことは難しい。

《えびね》という蘭を人からもらつて、「この蘭の根は、まるでエビみたいな形をしているんですよ」と言われたら、強く印象に残ると思う。それがカラッセだつたらどうだろう。

もちろん日本語の植物名にも、サクラ、マツ、スギ、ツバキのようなものを始めとして、ススキ、ユリ、キキョウ、オミナエシといった、いくら考えても実物との関連が浮かばないものはある。だが、これらはすべて基本語彙であつて、普段の生活の中で、いつとはなく覚えてしまうものである。しかし少し変わった、普通には見かけない草木の名は、必ずといつてもよいほど、その名のわけ、由来がどこかに示されていて、理解と記憶を助けるしくみになっていた。

中には、煎じて飲めば薬効があると言われて、その通りにしてみると病気がすぐ治つた、なるほど「現の証拠」だから《げんのしようこ》だなどという、言葉のあそびとか思えないものもあるが、とにかくこの方が学名のゲラニウムより覚えやすいことは間違いない。

飛燕草という名前は、デルフィニウムという名の洋種の花がかって輸入されたとき、当時の園芸家が知恵を絞って考え出したものである。その花を見ると、たしかに燕が飛び交っているような印象を受ける花で、②よくぞつけたと感心するほかはない傑作である。この美しい名前を捨てて、元のデルフィニウムになぜ戻す必要があるのか、私には全く理解出来ない。さきに示したカタカナ語の中には、このように先人が苦勞して考え出したものを、元に戻したものがかなりある。

一体どうして今の日本人は、せっかく以前からある美しくて理解しやすい、しかも覚えやすい日本語名があるものまで、わけの分からぬカタカナ外来語に置き換えてしまうのだろうか。

このようにカタカナ語が多すぎて、実際の生活や業務に困難を生じているという現象は、しかし何も園芸に限らず、もっと切実な社会的場面でも起っているのである。

(鈴木孝夫『日本語と外国語』岩波書店)

〔問題1〕

文章1の傍線部①「名は体を表す」について、「体」を言い換えている一文を文章1の中からぬき出しなさい。

〔問題2〕

文章2の傍線部②について、なぜ筆者は飛燕草という命名に感心しているのか。その理由を文章1に示されている考え方を入れて、五十文字以内で説明しなさい。

〔問題3〕

あなたはクラスメートとダンスグループを作ることになりました。グループ名をつけるとき、名実一体観と名前符号観のどちらの考え方をもとに名前をつけますか。文章1と文章2の両方を参考にしつつ四百字以内で説明しなさい。ただし、次の条件と「きまり」にしたがうこと。

条件 次の三段落構成にすること

①最初の段落では二つの考え方のちがいを説明しなさい。

②二つ目の段落では、あなたの意見を理由とともに述べなさい。

③三段落目にはまとめの一言を記しなさい。

〔きまり〕

○題名は書きません。

○最初の行から書き始めます。

○各段落の最初の字は一字下げて書きます。

○行をかえるのは、段落をかえるときだけとします。会話を入れる場合は行をかえてはいけません。

○、や。や」などもそれぞれ字数に数えます。これらの記号が行の先頭に来るときには、前の行の最後の文字と同じように書きます。（ますめの下に書いてもかまいません）

○。と」が続く場合には、同じますめに書いてもかまいません。この場合、「」で一字と数えます。

○段落をかえたときの残りのますめは、字数として数えます。

○最後の段落の残りのますめは、字数として数えません。